

資料

昭和52年度修士論文要旨

自己受容と対他者関係 について

中村 知子

〔目的〕

適応の問題は心理学において非常に重要な領域であり、それだけに種々な角度から多くの研究が行なわれてきている。そのアプローチの仕方として、外的枠組に照らして社会的規範に順応し調和しているか、或いは逸脱しているかという外的適応の観点からと、内的枠組、すなわち自己意識のあり方を問題にする内的適応の観点からとらえることができる。しかし、個人の personality の適応・不適応を問題にする場合、この両観点から抱括的にとらえていくことが必要であると思う。そこで本研究では内的適応を自己受容に、外的適応を対他者関係の問題に還元して、両者の関係の考察を試みた。その際の主な目的は、「自己受容が他人の理解と受容を呼びおこし、さらにはそのことによって、他人ともよりよい人間関係をもつことができる。」という Rogers, C. の見解を検討することである。

〔方法〕

- 被験者：学生97名(男子：45名 女子：52名)
- 手続き：自己記述尺度(長島貞夫らによって開発され7段階評定させる様になっている。)を使用して、現実自己、理想自己、現実の社会人、理想の社会人についての評定を求める。

そして現実自己と理想自己の差異点で自己受容の高低を、現実の社会人と理想の社会人の差異点で他者受容の高低を決める。又、対他者関係を調べるために西平直喜氏の基本的対人態度インベントリーをあわせて実施する。

〔結果〕

自己受容の高い者は低い者に比べ他者受容も高く、自己受容と他者受容の間に正の相関($r=0.63$, $P<0.1$)があることが見い出された。更に、自己受容の高い者はその対人態度が好ましく対人傾向も安定していた。この結果から、Rogers の見解は、一応実証されたと言えよう。

このことから、個人の欲求衝動が自我構造とうまく合致せず、十分な自己受容のみられない時、対他者関係も必然的に阻害されると考えられる。したがって、個人の自己受容は適切な対他者関係を可能にし、望ましい対他者関係は自己受容をさらに増大させ、ひいては個人の適応を促進するのであろう。

以上の事から、「個人が現実の自己を受け入れ内的な適応状態にある時、対他者関係においても他人を理解し受容することができ、このことがその人の人間関係をも望ましい方向に向かわせることになるのであろう。」と結論した。

〔討議〕

この種の研究では、各概念を測定する測度に多くの問題が残されている。

自己受容や他者受容を測定する測度として色々な測度が利用されてきた。しかし、これらが果して同じ自己受容、或いは他者受容の態度を測定していると言えるのか、又、どれが最も妥当な測度であるのかについてはまだ明確にされていないのである。今後、受容とはどういう事か、どういう状態をさすのかと言った受容の本質にもう一度たちかえって、これらの測度の検討をしていくことが必要であると思われる。

又、Rogers の見解に支持を与える結果が得られたが、自己受容と他者受容や対他者関係をこの様に単純に一对一の対応としてみてよ

いものであろうかという疑問が残されている。ここで得られた結果を一般化する前にもう一度、これらの間に介在する種々の要因を考慮に入れた多側面からの研究がなされるべきであると思う。

この様な根本的問題の解決が、今後の課題としてこの種の研究において強く望まれる。

概念達成課題に於ける注視
と仮説変更の発達的研究

田中 俊也

原著論文として本号に掲載